反骨のジャーナリストたち

『米騒動とジャーナリズム』を読み、富山の米騒動が全国的な動きに至る背景に、横山源之助、細川嘉六、井上江花など民衆側から熱心に発信したジャーナリストたちがいたことがわかった。権力側は民衆だけでなく徐々に報道への弾圧も強め、新聞記事部分的削除、空自のままでの発行や記事差し止め等を行った。メディアの委縮が進み、先の大戦では大手新聞社が営利のために翼賛体制に加担し、敗け戦を大勝利と報じ続け、犠牲者を増やしていった。その大罪は許し難い。

最近、米新大統領陣営が選挙戦で発した「fake news(偽情報」が話題になっているが、嘘は今に始まったことではない。BS 世界のドキュメンタリー『すべての政府は嘘をつく』を視ると、ベトナム、イラク戦争等々は、巧妙に仕組まれた嘘から始まつたことがわかる。

隠された不都合な真実を明らかにしたのが、独立メディアだ。報道の自由を確保するため、命の危険も経営も度外視して行動するジャーナリストたちの存在が大きい。Ｉ・Ｆストーンは、「70 年近く政府の記録を掘り起こし、欺瞞を暴いてきた。また、商業メディアの偽善と馴れ合い、嘘を暴いてきた。代替メディアこそ、本物のジャーナリズムだ。」と言う。また、[DEMOCRACY NOW！] のエイミー・グッドマンは、「必要なのは権力に対抗する勢力、権力の行き過ぎを正せるのはメディアだけだ」と語る。

グレン・グリーンウォルドたちは、米国家安全保障局(NSA)元職員スノーデンの内部告発を受け、世界に発信した。映画『スノーデン』では、世界中が米国の監視網下にあることを警告している。(ストーン監督曰く、「フィクションだがかなり事実を再現している。」)実際に日本でも工作活動をしていた彼によると、監視網はテロ防止目的ではなかったとのこと。想像を絶することが将来起きかねない。なにしろ狭い日本に 54 基もの原発があるのだから。

今なお福島第一原発の危険性は一向に減少していない。芸人の“おしどりマコさん”は、東電定例記者会見に連続参加しプロの記者より鋭い質問をして、隠されたデータを明るみにするなど、被災者から感謝されている。しかし、国内では殆ど発表の場が与えられず、生活は苦しいという。そんなマコさんをドイツのメディアが招待。何の制約もなく堂々と話をしている彼女だ。マコさんが平和・協同ジャーナリスト基金賞を受賞した。その式で『米騒動とジャーナリズム』の著者の一人である金澤敏子さんが隣に並ぶ映像を視て感激した。命と平和と自由を守るため、真偽を見極める力をつけるとともに、本物のジャーナリズムの担い手を応援し、幸せな未来に繋いでいきたい。